

高等学校におけるかぜ薬の適正使用教育の現状と課題

松本 禎明^{*1}・安川 春菜^{*2}・藤原 道弘^{*3}

^{*1}九州女子短期大学専攻科子ども健康学専攻 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

^{*2}仲原小学校 福岡県糟屋郡粕屋町仲原一丁目16-1 (〒811-2304)

^{*3}福岡大学 福岡市城南区七隈八丁目19-1 (〒814-0180)

(2019年11月1日受付、2019年12月18日受理)

要 旨

世界保健機関 (WHO) は2000 (平成12) 年に「自分自身の健康に責任を持ち、軽度な身体の不調は自分で手当てすること」を「セルフメディケーション」と定義し、その重要性を強調している。セルフメディケーションの中で身近な疾患は「かぜ」であり、その諸症状を緩和する「かぜ薬」は世に多数存在するものの、その数があまりに多いために選択の根拠を求められても明確に答えられる人は少ないであろう。製薬会社の広告ではTVコマーシャルに芸能人やその他の有名人を登用し、独特のキャッチコピーを入れて創意工夫をしている。しかしながら、そのイメージ戦略だけでは「かぜ薬」にどのような効果と留意点があるのかは判然とせず、選択の根拠に欠けているといわざるを得ない。

そこで本研究では、高校生に対して身近な存在であるかぜ薬の使用に関する意識調査を社会に巣立つ直前の学年である高等学校の3年生に対して調査を行った。今回の調査対象生徒総数は432人で、その内訳は普通科359人 (83%) の割合が圧倒的に多かったが、看護科73人 (17%) も併設されていたため看護教育の影響も比較し評価することとした。

その結果、かぜ薬に関する使用頻度とその自分にとっての重要度の認識を尋ねた所、看護科より普通科の方が高い割合を示していた。これは看護教育の成果として健康管理、すなわちセルフメディケーションへの意識の差が反映されたものと考えられる。また、かぜ薬並びにその情報の入手について両科共圧倒的に保護者依存型となっており、特に情報入手については学校の教諭への依存度は極めて低かった。これは身近な問題については保護者を重要視している現れであるが、医薬品の専門性においてはそれに保護者が精通しているとは考えにくく、生徒は医薬品の作用や安全性についての知識を得たいと強く感じているにも関わらず学校を信頼がおける窓口として認識していない可能性があることは憂慮すべき事態である。

以上のことから、高等学校における医薬品の適正使用教育は、セルフメディケーション力を培い健康被害の拡大を防ぐために必要であり、それを効果的に実践していくためにはできるだけ早い段階での導入が求められる。そのために、地域の専門家と協働しながら、学校の養護教諭がリーダーシップを発揮し、普段生徒の身近な存在である学級担任などへの研修強化並びに生徒への教育の改善充実が求められることが分かった。

1. 緒 言

WHOは2000 (平成12) 年、セルフメディケーションの有効性と危険性を語る中で、セルフメディケーションを「自分自身の健康に責任を持ち、軽度な身体の不調は自分で手当てすること」¹⁾と定義しその重要性を強調している。軽度の身体の不調を自ら気づき、その後の具体的な行動に出ることができる力は、逆に重症になりつつある場合にそれを察知し重症化を防止する重要な手立てとなり得る。すなわち、それは現在の自分の症状が、セルフメディケーションの範疇なのか、それともその域を出て医師の診察や薬の処方が必要な状態なのかを見極める力といえる。

セルフメディケーションの中で身近な疾患は「かぜ」であり、その諸症状を緩和する「かぜ薬」は世に多数存在するものの、その数があまりに多いために選択の根拠を求められても明確に答えられる人は少ないであろう。製薬会社の広告ではTVコマーシャルに芸能人やその他の有名人を登用し、独特のキャッチコピーを入れて創意工夫をしている。しかしながら、そのイメージ戦略だけでは「かぜ薬」にどのような効果と留意点があるのかは判然とせず、その選択の根拠が欠けているといわざるを得ない。

福岡県のある公立中学3年生の男女117人を対象とした堺らの調査結果によれば、男子の46.6%、女子の

48.1%が過去1か月間に、男子の93.2%、女子の94.2%が過去1年間に、軽度の身体不調の際に医薬品を使用していた。²⁾ また、中学校学習指導要領に加え、高等学校学習指導要領³⁾ 解説でも医薬品に関する学びの記述があり「医薬品には、医療用医薬品と一般用医薬品があること、承認制度により有効性や安全性が審査されていること及び販売に規制があることを理解できるようにする」⁴⁾ と記されていることから、若い世代で医薬品の適正使用教育を受けることは極めて重要である。とりわけ、一定のまとまりのある学習環境の最終段階で、社会に巣立つ直前の高校生にとってはなおさらである。

そこで、今回高等学校1校(3年生)に協力賜り、「かぜ薬」の使用と認識に関する書面調査を行い現状を把握し、今後の高等学校における身近な「かぜ薬」を意識した医薬品の適正使用教育の改善充実について検討することにした。なお、今回の調査対象の高等学校には普通科に加え看護科が併設されていたため看護教育を受けている場合の影響についても比較検討することにした。

II. 書面調査方法

1. 調査目的

一般にも高等学校の生徒にも身近な存在であるかぜ薬に焦点を当て、かぜ薬の使用に関する状況や情報源などの意識調査を行い、学校における医薬品の適正使用教育の在り方を検討することを目的とする。

2. 調査対象

西日本地区政令指定都市にある標準的私立A高等学校を1校選択し、3年生432人(普通科359人、看護科73人)の生徒を対象に2018(平成30)年6月に調査を行った。

3. 論理的配慮

回答は任意無記名(書面調査の生徒への事前説明、調査用紙の配布と回収は学級担任に委ねた)とし、得られた回答結果は統計的に処理し学校や個人が特定されないよう配慮を行った。

4. 調査内容

調査内容は表1に示した。

表1. 書面調査内容

<p>(質問1) 当てはまる項目に○を付けてください。学科(普通科 看護科)</p> <p>(質問2) 普段かぜ薬はよく使用していると思いますか、該当の記号にひとつに○を付けてください。 a.強く思う b.まあまあ思う c.あまりそう思わない d.全くそう思わない</p> <p>(質問3) かぜ薬はあなたにとってなくてはならない重要な存在ですか、該当の記号ひとつに○を付けてください。 a.強く思う b.まあまあ思う c.あまりそう思わない d.全くそう思わない:自由記述</p> <p>(質問4) 医師の診断による指示書(処方せん)以外で、実際に自分がかぜ薬を使おうとする場合、次の中で多い(又は可能性の高い)順に1位から番号を付けてください(最大8位まで)。 ()自分で新たに買う ()自分が既に持っている薬で済ませる ()保護者から新たに買ってもらう ()保護者が既に持っている薬をもらう ()保護者以外の家族に新たに買ってもらう ()保護者以外の家族が既に持っている薬をもらう ()友人・知人が持っている薬をもらう ()その他:自由記述</p> <p>(質問5) かぜ薬使用時、水やぬるま湯以外で飲むことは良くないことであると思いますか、該当の記号ひとつに○を付けてください。 a.強く思う b.まあまあ思う c.あまりそう思わない d.全くそう思わない</p> <p>(質問6) かぜ薬使用時、食後の指示がある場合、それは重要であると感じますか、該当の記号ひとつに○をつけてください。 a.強く思う b.まあまあ思う c.あまりそう思わない d.全くそう思わない</p> <p>(質問7) 痛みとかぜの諸症状があった場合、鎮痛薬とかぜ薬の使用はどのようにしてきましたか又はどのようにしたいと思えますか、該当のひとつに○を付けてください。 ()同時併用する ()両者の量を減らして同時併用する ()使用タイミングをずらして交互に使用する ()どちらかの使用を断念する ()その他:自由記述</p> <p>(質問8) かぜ薬などの医薬品の作用に関する情報をこれまで誰(どこ)から得てきましたか又はどこに強く信頼をおいていますか、該当の程度の順に1位から番号を付けてください(最大11位まで)。 ()友人・知人 ()保健室(養護)の先生 ()体育の先生 ()担任の先生 ()保護者 ()保護者以外の家族 ()薬剤師など医療の専門家 ()薬局薬店の現物パッケージや広告 ()テレビやCM、ネット広告、雑誌広告 ()テレビ医薬品関連特集番組 ()その他:自由記述</p> <p>(質問9) もっと知りたい(学校で学んでおきたい)かぜ薬の知識で優先度の高い順に1位から番号を付けてください(最大12位まで)。 ()体内での効果の仕組み ()安全性と有害性 ()使用間隔と飲むタイミング ()小児用と大人用の違い ()他の薬との飲み合わせ ()他の飲食物との飲み合わせ ()依存(常習)性 ()薬局薬店での相談や利用の仕方 ()薬の販売と購入の制度並びに法律 ()アレルギー症状 ()薬の保管法と有効期限 ()その他:自由記述</p> <p>(質問10) 世の中のかぜの諸症状を抑える薬には、医師の診断による指示書(処方せん)が必要な医療用医薬品とそれが不要な一般用医薬品、要指導医薬品に分類され実に多くのものがあります。中には不適切な使用で命に関わる問題に発展した例もあります。もし、あなたがかぜ薬に関して気になっていることがあれば自由に下に記述ください。</p>
--

III. 調査結果

書面調査の結果は以下の通りである。回収率は100%で、質問1の学科の回答は普通科359人、看護科73人、合計432人であった。各質問で無回答があった場合は集計から除外した。

(質問2)「普段かぜ薬はよく使用していると思いますか、該当の記号にひとつに○を付けてください。」の回答は次の通りであった。

普通科では、a.強く思う(14人、4%)、b.まあまあ思う(83人、23%)、c.あまりそう思わない(119人、34%)、d.全くそう思わない(138人、39%)という回答であった(図1)。

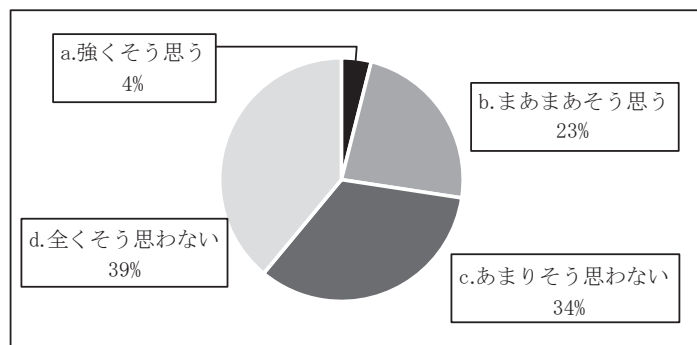


図1 質問2(普通科)の回答(n=354)

看護科では、a.強く思う(1人、1%)、b.まあまあ思う(11人、16%)、c.あまりそう思わない(27人、39%)、d.全くそう思わない(30人、44%)という回答であった(図2)。

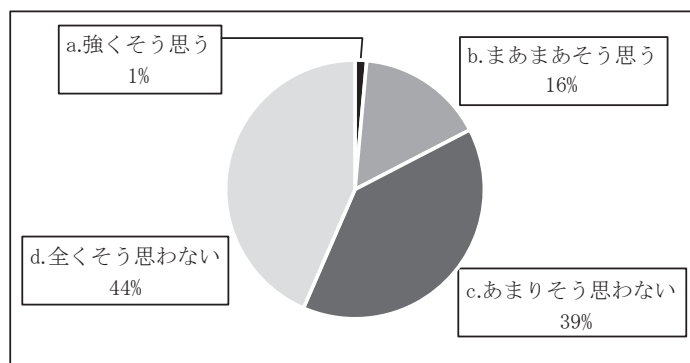


図2 質問2(看護科)の回答(n=69)

(質問3)「かぜ薬はあなたにとってなくてはならない重要な存在ですか、該当の記号ひとつに○を付けてください。」の回答は次の通りであった。

普通科では、a.強く思う(36人、10%)、b.まあまあ思う(112人、32%)、c.あまりそう思わない(112人、32%)、d.全くそう思わない(94人、26%)という回答であった(図3)。自由記述としてあげられたのは「かぜ」「頭痛」「のどの痛み」「偏頭痛」「鼻水」「アレルギー鼻炎」「せき止め」であった。

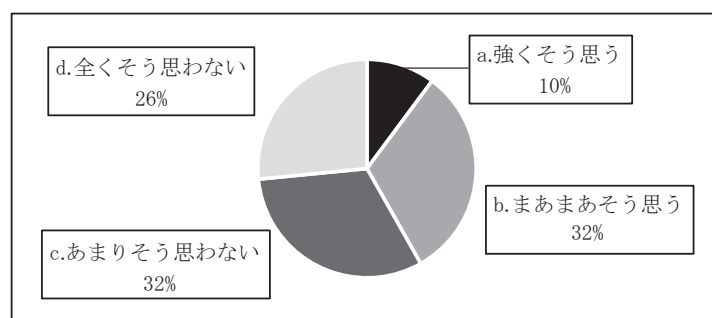


図3 質問3 (普通科) の回答 (n=354)

看護科では、a.強く思う (3人、4%)、b.まあまあ思う (20人、27%)、c.あまりそう思わない (26人、36%)、d.全くそう思わない (24人、33%) という回答であった (図4)。自由記述としてあげられたのは「偏頭痛」「鼻水」「かぜ」であった。

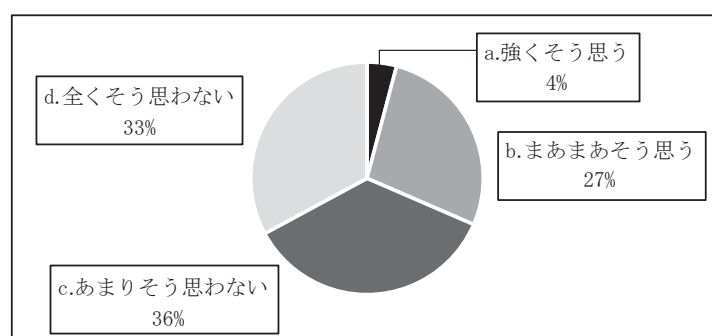


図4 質問3 (看護科) の回答 (n=73)

(質問4)「医師の診断による指示書 (処方せん) 以外で、実際に自分がかぜ薬を使おうとする場合、次の中で多い (又は可能性の高い) 順に1位から番号を付けてください (最大8位まで)」の回答は次の通りであった。

普通科での集計結果は次の通りであった (図5)。

- 1位 自分で新たに買う (44人)、自分が既に持っている薬で済ませる (87人)、保護者から新たに買ってもら (96人)、保護者が既に持っている薬をもら (115人)、保護者以外の家族に新たに買ってもら (1人)、保護者以外の家族が既に持っている薬をもら (3人)、友人・知人が持っている薬をもら (1人)、その他 (6人)
- 2位 自分で新たに買う (30人)、自分が既に持っている薬で済ませる (58人)、保護者から新たに買ってもら (70人)、保護者が既に持っている薬をもら (86人)、保護者以外の家族に新たに買ってもら (9人)、保護者以外の家族が既に持っている薬をもら (15人)、友人・知人が持っている薬をもら (4人)、その他 (0人)
- 3位 自分で新たに買う (27人)、自分が既に持っている薬で済ませる (47人)、保護者から新たに買ってもら (61人)、保護者が既に持っている薬をもら (37人)、保護者以外の家族に新たに買ってもら (18人)、保護者以外の家族が既に持っている薬をもら (21人)、友人・知人が持っている薬をもら (26人)、その他 (0人) という回答であった。

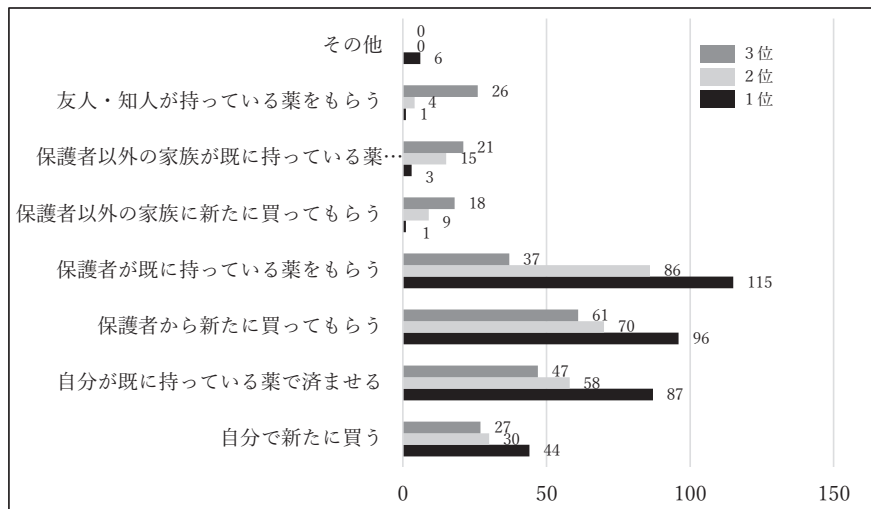


図5 問4（普通科）の回答（人）（n=359）

看護科では次の通りであった（図6）。

- 1位 自分で新たに買う（6人）、自分が既に持っている薬で済ませる（21人）、保護者から新たに買ってもらう（18人）、保護者が既に持っている薬をもらう（25人）、保護者以外の家族に新たに買ってもらう（0人）、保護者以外の家族が既に持っている薬をもらう（3人）、友人・知人が持っている薬をもらう（0人）、その他（0人）
- 2位 自分で新たに買う（10人）、自分が既に持っている薬で済ませる（9人）、保護者から新たに買ってもらう（21人）、保護者が既に持っている薬をもらう（14人）、保護者以外の家族に新たに買ってもらう（2人）、保護者以外の家族が既に持っている薬をもらう（3人）、友人・知人が持っている薬をもらう（1人）、その他（0人）
- 3位 自分で新たに買う（7人）、自分が既に持っている薬で済ませる（9人）、保護者から新たに買ってもらう（10人）、保護者が既に持っている薬をもらう（8人）、保護者以外の家族に新たに買ってもらう（1人）、保護者以外の家族が既に持っている薬をもらう（12人）、友人・知人が持っている薬をもらう（2人）、その他（0人）という回答であった。

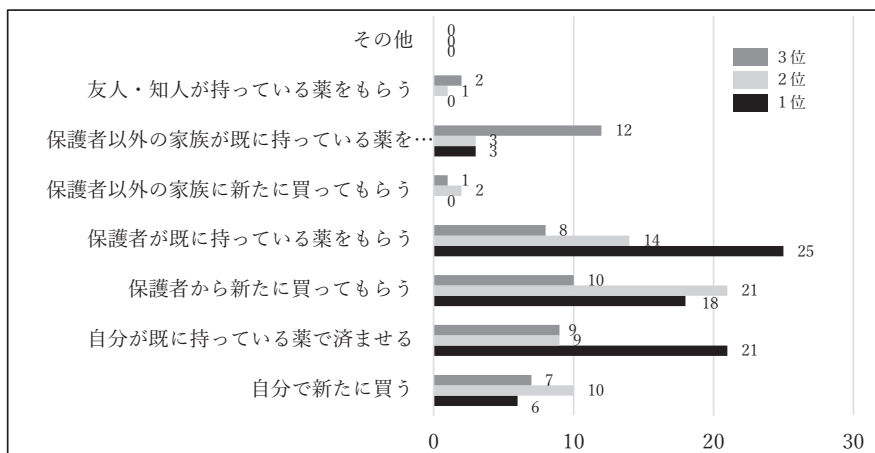


図6 問4（看護科）の回答（人）（n=73）

（質問5）「かぜ薬使用時、水やぬるま湯以外で飲むことは良くないことだと思いますか、該当の記号ひとつに○を付けてください。」の回答は次の通りであった。

普通科では、a.強くそう思う (57人、16%)、b.まあまあそう思う (108人、30%)、c.あまりそう思わない (104人、29%)、d.全くそう思わない (88人、25%) という回答であった (図7)。

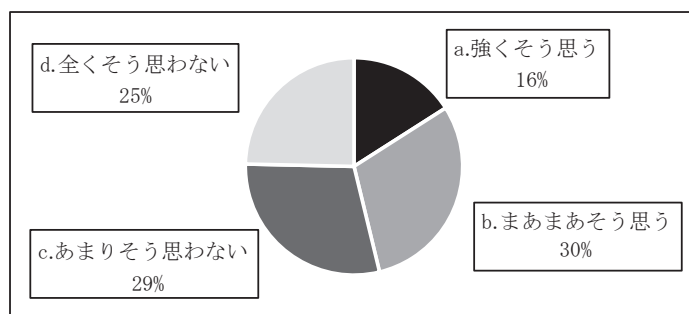


図7 質問5 (普通科) の回答 (n=357)

看護科では、a.強くそう思う (11人、15%)、b.まあまあそう思う (31人、43%)、c.あまりそう思わない (14人、19%)、d.全くそう思わない (17人、23%) という回答であった (図8)。

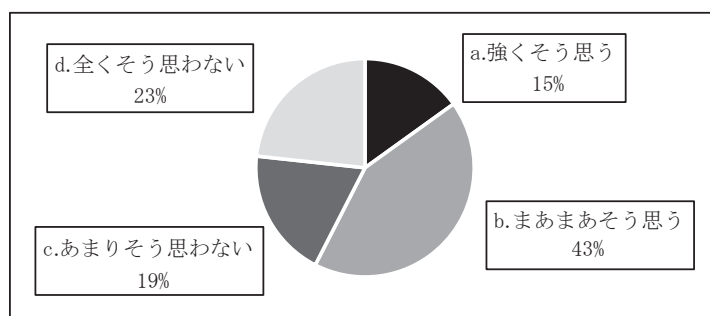


図8 質問5 (看護科) の回答 (n=73)

(質問6)「かぜ薬使用時、食後の指示がある場合、それは重要であると意識しますか、該当の記号ひとつに○をつけてください。」の回答は次の通りであった。

普通科では、a.強くそう思う (160人、45%)、b.まあまあそう思う (145人、41%)、c.あまりそう思わない (36人、10%)、d.全くそう思わない (13人、4%) という回答であった (図9)。

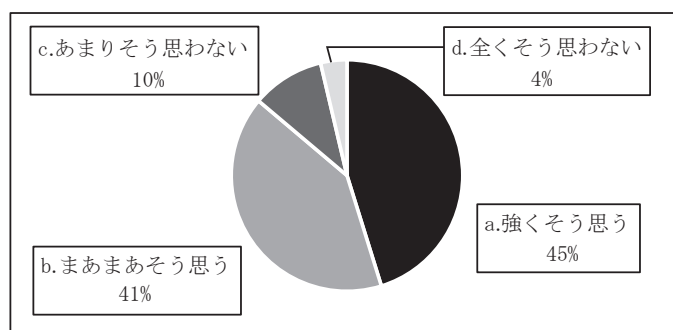


図9 質問6 (普通科) の回答 (n=354)

看護科では、a.強くそう思う (31人、43%)、b.まあまあそう思う (36人、49%)、c.あまりそう思わない (6人、8%)、d.全くそう思わない (0人、0%) という回答であった (図10)。

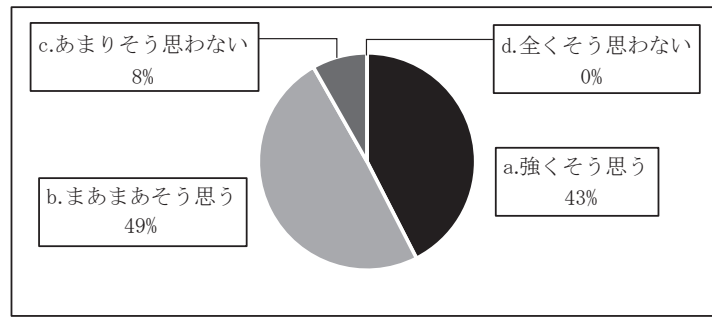


図10 質問6 (看護科) の回答 (n=73)

(質問7)「痛みとかぜの諸症状があった場合、鎮痛薬とかぜ薬の使用はどのようにしてきましたか又はどのようにしたいと思えますか、該当の記号ひとつに○を付けてください。」の回答は次の通りであった。

普通科では、同時併用する (116人、34%)、両者の量を減らして同時併用する (11人、3%)、使用タイミングをずらして交互に使用する (88人、25%)、どちらかの使用を断念する (109人、32%)、その他 (22人、6%) という回答であった (図11)。自由記述としてあげられたのは、「説明書次第で変わる」「成分を見て決める」「併用することがない」「鎮痛薬は使用しない」「薬局の薬剤師に確認する」「医者に相談して飲む」「病院からもらった薬を飲む」があった。

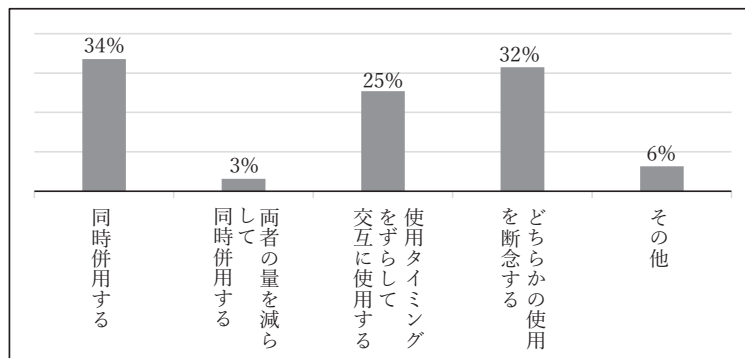


図11 質問7 (普通科) の回答 (n=346)

看護科では、同時併用する (25人、35%)、両者の量を減らして同時併用する (0人、0%)、使用タイミングをずらして交互に使用する (13人、18%)、どちらかの使用を断念する (29人、41%)、その他 (4人、6%) という回答であった (図12)。自由記述としてあげられたのは、「病院に行く」があった。

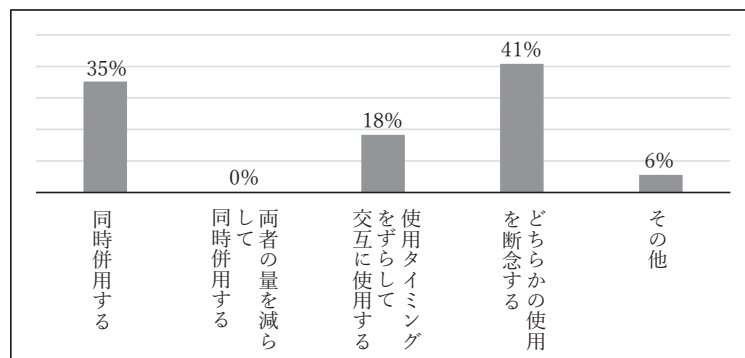


図12 質問7 (看護科) の回答 (n=71)

(質問8)「かぜ薬などの医薬品の作用に関する情報をこれまで誰(どこ)から得てきましたか又はどこに強く信頼をおいていますか、該当の程度の順に1位から番号を付けてください(最大11位まで)」の回答は次の通りであった。

普通科では次の通りであった(図13)。

○1位 友人・知人(21人)、保健室(養護)の先生(15人)、体育の先生(15人)、担任の先生(2人)、保護者(153人)、保護者以外の家族(6人)、薬剤師など医療の専門家(79人) 薬局薬店の現物パッケージや広告(27人)、テレビCM、ネット広告、雑誌広告(22人)、テレビ医薬品関連特集番組(4人)、その他(5人)
 ○2位 友人・知人(20人)、保健室(養護)の先生(25人)、体育の先生(12人)、担任の先生(8人)、保護者(57人)、保護者以外の家族(25人)、薬剤師など医療の専門家(42人) 薬局薬店の現物パッケージや広告(41人)、テレビCM、ネット広告、雑誌広告(18人)、テレビ医薬品関連特集番組(7人)、その他(3人)
 ○3位 友人・知人(20人)、保健室(養護)の先生(20人)、体育の先生(12人)、担任の先生(5人)、保護者(26人)、保護者以外の家族(15人)、薬剤師など医療の専門家(19人) 薬局薬店の現物パッケージや広告(33人)、テレビCM、ネット広告、雑誌広告(26人)、テレビ医薬品関連特集番組(14人)、その他(1人)という回答であった。

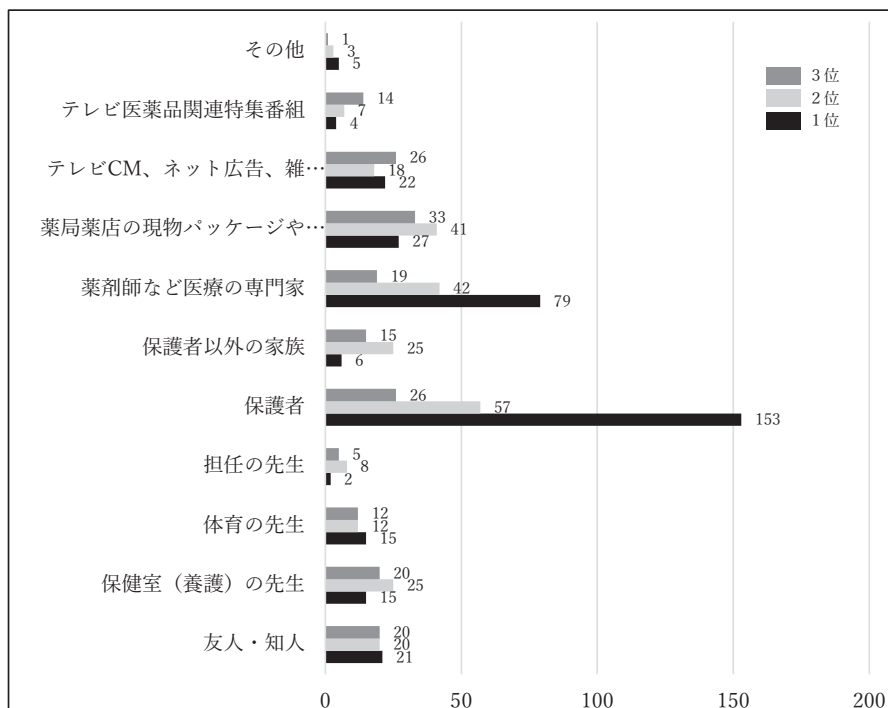


図13 質問8(普通科)の回答(人)(n=359)

看護科では次の通りであった(図14)。

○1位 友人・知人(3人)、保健室(養護)の先生(0人)、体育の先生(0人)、担任の先生(0人)、保護者(37人)、保護者以外の家族(0人)、薬剤師など医療の専門家(19人) 薬局薬店の現物パッケージや広告(5人)、テレビCM、ネット広告、雑誌広告(6人)、テレビ医薬品関連特集番組(1人)、その他(1人)
 ○2位 友人・知人(2人)、保健室(養護)の先生(5人)、体育の先生(0人)、担任の先生(0人)、保護者(12人)、保護者以外の家族(2人)、薬剤師など医療の専門家(13人) 薬局薬店の現物パッケージや広告(9人)、テレビCM、ネット広告、雑誌広告(8人)、テレビ医薬品関連特集番組(2人)、その他(0人)
 ○3位 友人・知人(4人)、保健室(養護)の先生(3人)、体育の先生(1人)、担任の先生(0人)、保護者(8人)、保護者以外の家族(3人)、薬剤師など医療の専門家(5人) 薬局薬店の現物パッケージや広告(13人)、テレビCM、ネット広告、雑誌広告(4人)、テレビ医薬品関連特集番組(3人)、その他(0人)

という回答であった。

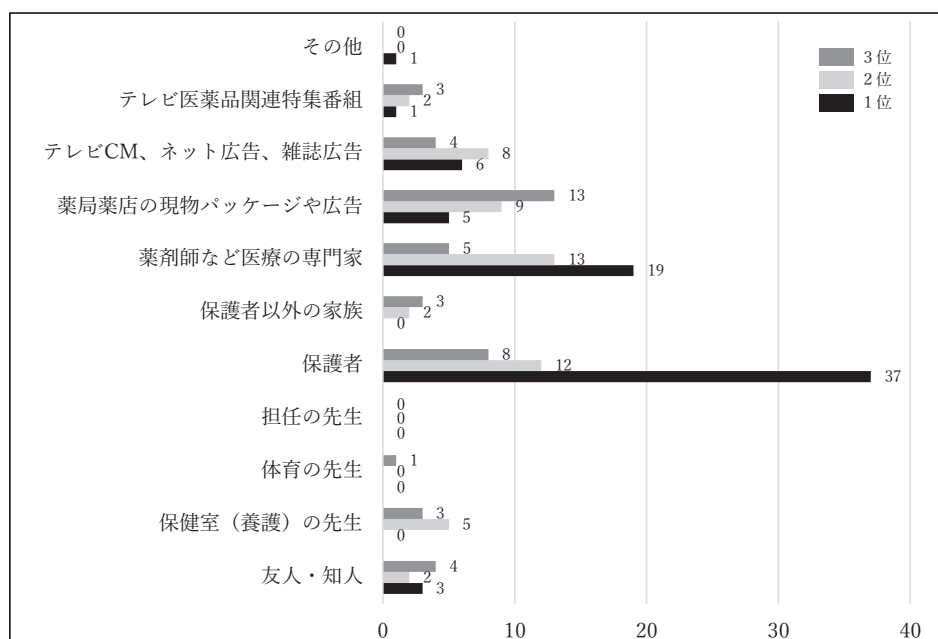


図14 質問8（看護科）の回答（人）（n=73）

（質問9）「もっと知りたい（学校で学んでおきたい）かぜ薬の知識で優先度の高い順に1位から番号を付けてください（最大12位まで）」の回答は次の通りであった。

普通科では次の通りであった（図15）。

○1位 体内での効果の仕組み（93人）、安全性と有害性（92人）、使用間隔と飲むタイミング（29人）、小児用と大人用の違い（10人）、他の薬との飲み合わせ（24人）、他の飲食物との飲み合わせ（26人）、依存（常習）性（5人）、薬局薬店での相談や利用の仕方（4人）、薬の販売と購入の制度並びに法律（1人）、アレルギー症状（31人）、薬の保管法と有効期限（12人）、その他（12人）

○2位 体内での効果の仕組み（35人）、安全性と有害性（52人）、使用間隔と飲むタイミング（41人）、小児用と大人用の違い（30人）、他の薬との飲み合わせ（31人）、他の飲食物との飲み合わせ（27人）、依存（常習）性（13人）、薬局薬店での相談や利用の仕方（4人）、薬の販売と購入の制度並びに法律（4人）、アレルギー症状（18人）、薬の保管法と有効期限（8人）、その他（3人）

○3位 体内での効果の仕組み（20人）、安全性と有害性（22人）、使用間隔と飲むタイミング（47人）、小児用と大人用の違い（18人）、他の薬との飲み合わせ（40人）、他の飲食物との飲み合わせ（22人）、依存（常習）性（26人）、薬局薬店での相談や利用の仕方（6人）、薬の販売と購入の制度並びに法律（10人）、アレルギー症状（13人）、薬の保管法と有効期限（12人）、その他（0人）という回答であった。記述としてあげられたのは、「副作用について」であった。

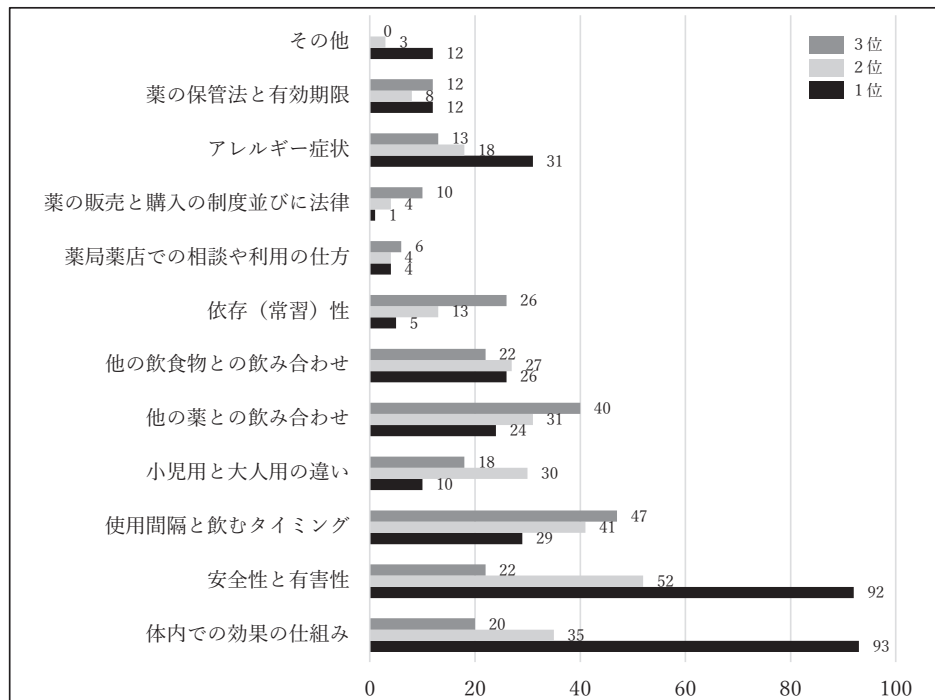


図15 質問9(普通科)の回答(人)(n=359)

看護科は次の通りであった(図16)。

○1位 体内での効果の仕組み(18人)、安全性と有害性(24人)、使用間隔と飲むタイミング(5人)、小児用と大人用の違い(1人)、他の薬との飲み合わせ(12人)、他の飲食物との飲み合わせ(5人)、依存(常習)性(0人)、薬局薬店での相談や利用の仕方(0人)、薬の販売と購入の制度並びに法律(1人)、アレルギー症状(2人)、薬の保管法と有効期限(3人)、その他(1人)

○2位 体内での効果の仕組み(5人)、安全性と有害性(12人)、使用間隔と飲むタイミング(9人)、小児用と大人用の違い(1人)、他の薬との飲み合わせ(11人)、他の飲食物との飲み合わせ(7人)、依存(常習)性(4人)、薬局薬店での相談や利用の仕方(1人)、薬の販売と購入の制度並びに法律(0人)、アレルギー症状(5人)、薬の保管法と有効期限(4人)、その他(0人)

○3位 体内での効果の仕組み(7人)、安全性と有害性(5人)、使用間隔と飲むタイミング(11人)、小児用と大人用の違い(3人)、他の薬との飲み合わせ(7人)、他の飲食物との飲み合わせ(5人)、依存(常習)性(3人)、薬局薬店での相談や利用の仕方(2人)、薬の販売と購入の制度並びに法律(2人)、アレルギー症状(6人)、薬の保管法と有効期限(4人)、その他(0人)という回答であった。

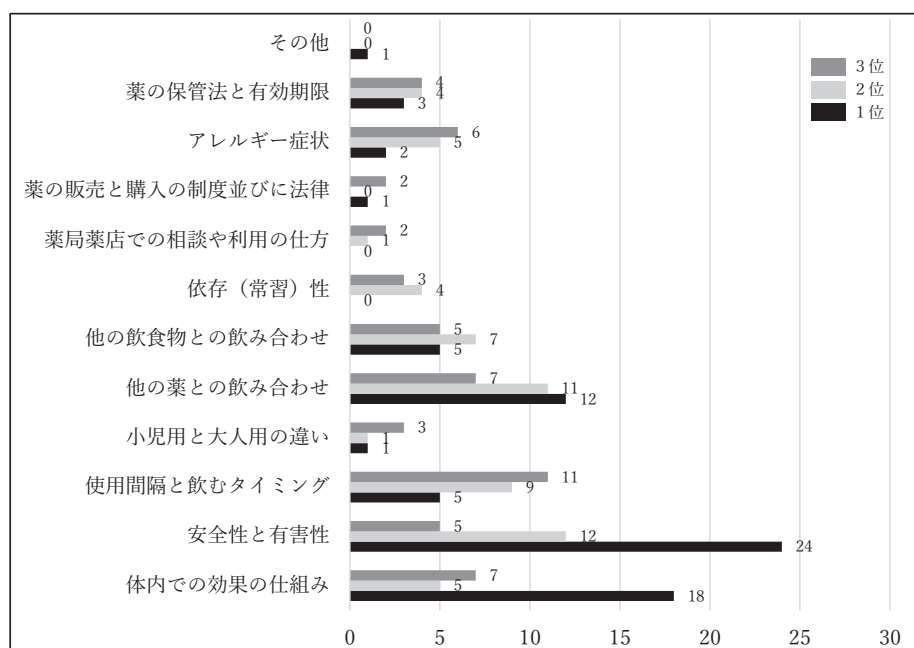


図16 質問9(看護科)の回答(人)(n=73)

(質問10)「世の中のかぜの諸症状を抑える薬には、医師の診断による指示書(処方せん)が必要な医療用医薬品とそれが不要な一般用医薬品、要指導医薬品に分類され実に多くのものがあります。中には不適切な使用で命に関わる問題に発展した例もあります。もし、あなたがかぜ薬に関して気になっていることがあれば自由に下に記述ください。」の記述内容は次の通りであった。

- ・アルコールなどと共に飲用すると死ぬと聞いたことがあるが本当か。
- ・かぜ薬を飲み続けると効き目が弱くなるか。 ・薬の効果が知りたい。
- ・期限が過ぎた薬を飲んでしまった。 ・かぜ薬を飲むと眠くなるのはどうしてか。
- ・薬に使用期限はあるのか。 ・副作用が出た場合薬を飲むのを止めた方がいいのか。
- ・医師が処方した薬でも危険ではないのか。 ・かぜ薬の種類が多く、どの薬が一番効くのか知りたい。
- ・効果の違いがパッケージなどを見ただけでは分からない。

IV. 考察

普段かぜ薬をよく使用しているかについて

「強くそう思う」と「まあまあそう思う」を合わせた肯定的回答は普通科27%、看護科17%と両科共低い割合であったが、これは調査時期がかぜの流行シーズンではなかったことが影響していると考えられる。看護科の生徒の数値がより低いのは看護教育を受けている効果が慎重な使用につながっている可能性が考えられる。堺らは中・高校生の過去1か月の医薬品使用経験の研究で、症状では男女ともに「かぜ」で医薬品を使用した者が最も多かった²⁾と報告していることから、一般に中・高校生のかぜ薬の使用に関する認識は高いものと思われる。

かぜ薬はあなたにとってなくてはならない重要な存在かについて

「強くそう思う」と「まあまあそう思う」を合わせた肯定的回答は普通科42%、看護科31%であった。これは、かぜの症状が出た時を想定した踏み込んだ質問と受け止められ質問2より肯定的回答がかなり増加したものと予想されるが、看護科の方が低い割合を示している傾向は同様であった。このことも看護教育における学びの中で医薬品への安全性意識が影響したものと考えられる。

かぜ薬を使用する場合の入手方法について

「保護者が既に持っている薬をもらう」という項目で1位と2位を合わせた回答は普通科201人(56%)、看護科39人(53%)と半数以上を占め極めて多く両科共保護者の影響は極めて大きいことが分かった。こ

これは、寺町らの研究によると小・中・高校生の医薬品の入手方法は、「両親・祖父母」が6割以上であった⁵⁾という報告と一致した。しかしながら、保護者が学校教育を受けていた時期の状況を勘案すればその当時十分な医薬品に関する教育を当時受けていた可能性は低いと考えられることから、保護者会などの機会を通しての学校主催の保護者教育の必要性も感じられる。

かぜ薬使用時、飲み物の飲み合わせについて

「強くそう思う」と「まあまあそう思う」を合わせた肯定的回答は普通科46%、看護科58%と半数程度を占めた。医薬品を水やぬるま湯以外で飲むと薬の効き目が変わること、また、緑茶などに含まれているカフェインは薬との相性が良くない物質で、かぜ薬やせき止めに配合されている麻黄やエフェドリンでは作用が強められ、不眠や不整脈、情動障害といった症状が表れる可能性がある。結果が、看護科の割合が若干高かった理由として看護教育全体での患者の治療に係る服薬指導の重要性を学んでいることが影響しているものと考えられる。

かぜ薬使用時、食後の指示がある場合の重要性について

「強くそう思う」と「まあまあそう思う」を合わせた肯定的回答は、普通科86%、看護科92%と両科共極めて高い割合を示した。薬は、それぞれ定められた時間に飲まないとも効果に変化を与えることがある。望月の研究では、「医薬品の適正使用の三原則は、正しい薬を、正しい量で、正しい時間に使うことである」⁶⁾と報告されている。また、上田の研究では医薬品の使用時間・使用回数・使用量を守り、適正に使用することは、医薬品の主作用を効果的に引き出すだけでなく副作用のリスクも低減させることにつながる⁷⁾としている。このように食後の指示があることは意味があり、決められた服用時間を守ることは、薬の効果と安全性の点からも、重要なことであると多くの生徒が感じているものと考えられる。

鎮痛薬とかぜ薬の使用について

普通科は「同時併用する」、看護科は「どちらかの使用を断念する」が最も多かった。「同時併用する」という回答は両科共30%台で同様であったが、「どちらかの使用を断念する」という回答では看護科41%と若干上回っており、「使用タイミングをずらして交互に使用する」という回答では、看護科18%と若干少なかった。この理由は専門的観点から成分の重複使用となる可能性を意識したためではないかと考えられる。かぜ薬のほとんどにはイブプロフェンやアセトアミノフェンといった解熱鎮痛成分が含まれており、これらの成分は鎮痛薬の成分と重複するため同時併用が望ましくない。同時併用することで、主作用が強くなる反面副作用が発現する可能性が高くなる。

かぜ薬などの医薬品の作用に関する情報について

「保護者」の1位と2位を合わせた回答は、普通科210人、看護科49人、両科とも高い数値を示した。「薬剤師など医療の専門家」の1位と2位を合わせた回答は、普通科121人、看護科32人と看護科が高い数値を示したのは、医療職としての専門性を重視している現れと考えられる。「担任の先生」の1位と2位を合わせた回答は普通科10人、看護科0人、「体育の先生」の1位と2位を合わせた回答は普通科27人、看護科0人と学校の先生への期待が低いことが分かった。寺町らの「医薬品に関する教育」に対する指導者の意識では、多くの指導者が「医薬品についての授業」は教諭が行うよりも学校薬剤師や専門機関の外部が講演会を開いた方が有効だと思っていることが明らかになった⁸⁾と報告している。しかしながら、学校教育の中で特に高等学校においては社会へ巣立つ生徒に対して日常生活の中で共通に必要な健康管理のひとつとして医薬品の適正使用教育やアドバイスを日頃から行っていくことは極めて重要であり、外部の専門家ばかりに丸投げするような姿勢があってはならない。また、近年学校生活を送る若い世代にストレスや悩みを解決しようと一般用医薬品としてのかぜ薬の乱用問題⁹⁾も注視されていることもあり学校教育の現場での教諭の主導する学びの機会を設けることは大切である。学校教育において、医薬品の適正使用教育のリーダーはやはりその特質から養護教諭であるべきで、養護教諭がいかに医薬品の専門家と交流を深め研修を積みそれを教育の現場の生徒に一番近い距離にいる学級担任に対する研修に生かしていくことが重要である。このような対応が生徒に正しい医薬品の知識が効果的に浸透していくものと考えられる。

かぜ薬の知識で学校で学びたいことについて

「安全性と有害性」の1位と2位を合わせた回答は普通科144人、看護科36人と最も多かった。北垣らの

報告では、医薬品情報は、個人の判断や行動に影響を与えることから、学校においても情報を収集し正しく理解、判断できるような医薬品適正使用の育成が求められている。¹⁰⁾ 今後、高等学校におけるかぜ薬など身近な医薬品の適正使用教育にはその専門性からやはり養護教諭がリーダーシップを発揮していかなければならない。そして、養護教諭だけではなく教諭全体の医薬品に関する知識レベルを高めることができるように研修を充実させ学校全体で取り組む姿勢が重要である。また、生徒自らの健康や医薬品適正使用に関する知識、判断力を身に付けていくためには、早期教育が必要であり、小学校のできるだけ早い段階からの医薬品の適正使用教育の導入が望まれる。そのためにも教える側の力量形成の観点から研修体制の強化にも取り組む必要がある。

薬で気になっていることについて（自由記述）

「期限を過ぎた薬を飲んでしまった」「薬には使用期限があるのか」などの記述から薬の使用状況に重大な懸念がある。使用期限については、開封していない場合のことであり、一旦開封した薬の期限は品質が保証されないばかりか、家庭内での保管方法にも大きな影響を受ける。香田らの中学生の医薬品教育については、生徒達にとって医薬品は身近な存在であるにも関わらず、適正使用のための知識や情報が十分ではないことから、基礎的な医薬品教育を行うことが必要¹¹⁾としている。いずれにしても、使用期限のことを含め医薬品の使用に係る基本的事項については、安全性を担保する根幹に関わることであるため、そのような重要事項を学ぶことができる教育体制の整備は急務であると考えられる。

V. 総括及び結論

この研究では、標準的な私立高等学校において身近な存在であるかぜ薬の使用に関する意識調査を社会に巣立つ直前の学年の3年生に対して行った。今回の調査対象高等学校の3年生の総数は432人で、普通科(359人、83%)の割合が圧倒的に多かったが、看護科(73人、17%)も併設されていたため看護教育の影響も比較し評価することとした。

調査の結果次のようなことが分かった。

1. かぜ薬に関する使用頻度と必要性の重要度認識は看護科より普通科の方が高い割合を示していたが、これは看護教育による健康管理意識の差が反映されたものと考えられる。
2. かぜ薬並びにその情報の入手については、総じて圧倒的に保護者依存型となっており、特に情報入手については、学校への依存度は極めて低かったことから、医薬品の適正使用における学校教育の改善充実が求められる。
3. かぜ薬に関して生徒が知りたいことは、その作用と安全性についての関心が高かった。

以上のことから、高等学校における医薬品の適正使用教育は、セルフメディケーション力を培い健康被害の拡大を防ぐために必要であり、それを効果的に実践していくためにはできるだけ早い段階での教育の導入、同時に教える側の研修強化が求められる。

VI. 謝辞

本研究を進めるにあたり、調査にご協力頂いた高等学校関係各位に深謝する。

VII. 参考文献

- 1) General Policy Issues The benefits and risks of self-medication WHO Drug Information、14 (1)、(2000) pp.1-2
- 2) 堺千紘、川畑徹朗、李美錦、菱田一哉、宋昇勲、今出友紀子、中・高校生の医薬品使用にかかわる行動および態度の実態、学校保健研究55、(2013) pp.295～307
- 3) 文部科学省、第二章 第六節 保健体育、高等学校学習指導要領、東山書房、(2008) pp.90～70
- 4) 文部科学省、第二章 第二節 保健、高等学校学習指導要領解説、保健体育編・体育編、東山書房、(2009) pp.111～121
- 5) 寺町ひとみ、太田拓希、香田由美、鬼頭英明、駒田奈月、志賀仁美、田村顕人、館知也、土屋照雄、勝

- 野眞吾、小・中・高校生の「医薬品の正しい使い方」に関する知識・意識および指導実施状況、38、(2012) pp.767～779
- 6) 望月眞弓、よりよいセルフメディケーションの実施に必要な知識、学校保健研究、56、(2015) pp.400～404
- 7) 上田裕司、学習指導要領による中学校・高等学校の医薬品の学習、学校保健研究、56、(2015) pp.409～411
- 8) 寺町ひとみ、斎藤康介、江崎宏樹、加藤未紗、白井一将、野口義紘、館知也、勝野眞吾、全国の中学校における「医薬品に関する教育」の指導実態調査 医療薬学、41、(2015) pp.870～879
- 9) 厚生労働省医薬・生活衛生局、医薬品・医療機器等安全情報、365、(2019) pp.16～21
- 10) 北垣邦彦：我が国の学校における医薬品に関する教育の過去・現在・未来、学校保健研究、56、(2015) pp.396～399
- 11) 香田由美、鬼頭英明、医薬品の教育への養護教諭の関わりの検討—養護教諭の役割を生かした保健指導の実践から—、日本養護教諭教育学会誌、17、(2014) pp. 55～62

Improvement and substantiality of cold medicine education in a high school

Yoshiaki MATSUMOTO^{*1}, Haruna YASUKAWA^{*2}, Michihiro FUJIWARA^{*3}

^{*1}Advanced course of child care and education at Kyushu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

^{*2}Nakahara Elementary School

16-1 Nakahara1-choume, Kasuya-machi, Kasuya-gun, Fukuoka 811-2304, Japan

^{*3}Fukuoka University 19-1 Nanakuma8-chome, Jonan-ku, Fukuoka-shi, 814-0180, Japan

Abstract

When we checked it about the use situation of the cold medicine for a general course students and nursing course students, the general course students had use frequency higher than a nursing course students, and necessity was felt. The dependence to the parents were very high about acquiring knowledge about use of a close cold medicine, and that to a high school teacher was low.

A healthcare room teacher has to be offering the latest dissemination of information and appropriate knowledge deeply by proper use education of a cold medicine from being it.

Keywords : medicine for cold, education, healthcare room teacher, high school